

論文内容の要旨

氏名	須賀 佑磨
Factors associated with the increased risk of atlantoaxial osteoarthritis: A retrospective study (和訳) 外側環軸関節の関節症性変化のリスク増加に関連する要因; 後ろ向き研究	

論文内容の要旨

外側環軸関節の変形性関節症は、頸部痛や後頭部・後頸部痛みの原因となるが、初期症状は非特異的で、診断が遅延する症例も多く認められる。過去の報告では有病率は4.8%とされ、加齢とともに有病率は増加するとされている。治療方法としては保存治療が優先されるが、改善しない場合は環軸椎固定手術が有用であると報告される。一般的に、頸部痛を訴える外来患者に対しては通常正面・側面の頸椎レントゲンを実施することが多い。しかし、これらの2方向の頸椎レントゲンでは変形性外側環軸関節症の診断は困難である。変形性外側環軸関節症の診断には、開口位レントゲンやCTが有用であるが、どのような要因を持つ患者で外側環軸関節の変形性関節症のリスクが高く、開口位レントゲンを行うべきかについての知見はない。本研究は、変形性外側環軸関節症に関与する要因を調査し、どのような患者に開口位レントゲンを施行すべきかを明らかにすることを目的とした。

2014年1月1日から2019年12月31日に当院救命救急センターに搬送、全身CTを施行された18歳以上の患者1694症例のCTデータを調査した。17歳以下、CT撮影範囲に頸椎画像がない、環軸椎の外傷性変化・環軸椎の手術既往歴がある、関節リウマチ、透析施行歴のある症例を除外した。調査項目は、年齢、性別、正中環軸椎関節の関節症性変化の有無、歯突起骨嚢胞、横靭帯石灰化とした。変形性外側環軸関節症や変形性正中環軸関節症の程度は、non-to-mild、moderate、severeに半定量化し、non-to-mildを関節症性変化なし、moderateとsevereを関節症性変化ありとした。また、年齢は8つの年齢グループに区分して解析を行った。各調査項目を説明変数、環軸変形性関節症の有無を目的変数として多変量ロジスティック解析を行った。

1266症例を対象とし、男性は69.4%、平均年齢は54.9±20.4歳であった。多変量ロジスティック解析で、60歳以上:オッズ比(OR) 20.5(95% CI; 6.2-67.2, p<0.01)、横靭帯の石灰化の存在:OR 4.9(95% CI; 2.4-9.9, p<0.01)、女性である:OR 3.3(95% CI; 1.9-5.7, p<0.01)、正中環軸関節の関節症性変化がない:OR 2.1(95% CI; 1.2-3.8, p<0.01)ということが変形性外側環軸関節症の発生に関わる要因であった。

変形性外側環軸関節症に関連する要因として、多変量ロジスティック回帰分析を用いて検討を行ったところ、後頭部～後頸部痛を有する①60歳以上、②女性、③横靭帯石灰化を有する、④正中環軸関節の関節症性変化がない場合には、変形性外側環軸関節症を有している可能性があり、頸椎の正面・側面撮影だけでなく、開口位レントゲンの撮影や頸椎CT撮影の追加を考慮すべきである。